

「自分たちでできることと見つけること」も大切です

今年4月、知的障害のある奈良崎真弓さんが青年海外協力隊の短期隊員としてマレーシアに派遣された。日本で障害者自身の自発的な「本人活動」に取り組む奈良崎さんは、マレーシアの障害者たちに何をもちたらしめたのか。支援者として奈良崎さんの活動を支えた佐藤陽子さんの役割とあわせて紹介する。



photo by Asada Yuki

挑戦者たち
Stories of
Challengers
 Vol.34

障害当事者と周囲を変え るセルフアドボカシー

「皆さん！日本の踊りを教えまーす！」
 講師の元気な声に誘われ、民族衣装をまとった人たちが体を動かす。緊張していた顔に、徐々に笑みが浮かんでくる。ここはマレーシアの知的障害者による活動を支援するNGO。講師役の奈良崎真弓さんは、ソーシャルワーカーとして派遣され



ワークショップで聴衆の反応を見ながら臨機応変に振る舞う奈良崎さん。参加者が退屈そうにしているときは、体操をしたり、踊りや歌を教えたりした

た青年海外協力隊員だ。

近年、障害者福祉の分野では、差別撤廃のためのアドボカシーや施策策定において、障害者本人が主要な役割を果たすことが主流になっている。今年5月に発効した国連の障害者権利条約も、条約交渉の過程で多くの障害当事者がリーダーシップを發揮した。

マレーシアでは2005年から、JICAの「障害者福祉プログラム強化のための能力向上計画」プロジェクトが実施され

ている。障害者の自立と社会参加を進めるため、教育省や福祉局、障害当事者団体のNGOスタッフに対して研修などを行っており、その講師のほとんどを障害者自身が務めている。

プロジェクトには、理学療法士や作業療法士、養護などの協力隊員やシニア海外ボランティアも参加し、その活動を後押ししている。これまで、車いすバスケットボール指導者、視覚障害のある水泳指導者、手話通訳養成者、鍼灸指導者といった障害当事者も派遣されてきた。奈良崎さんは知的障害の当事者で、彼女が日本で行っている活動を紹介するためここに来て来た。

プロジェクトでは、「セルフアドボカシー」、つまり、障害者本人が同じ障害のある仲間たちに対して啓発活動をし、共に考え、自ら社会に働き掛けることを重視している。それによって障害当事者の力をつけ、「障害者だからできない」という思い込みを持たった周囲の考えを変えていく。日本では「知的な障害がある人を構成員とした、本人たちが決定権を持ったグループ活動」を「本人活動」と呼び、セルフアドボカシーの一形態として、多く

の本人活動が行われている。ふるさとの横浜市を飛び出し、海外でも自身の本人活動を紹介してきた奈良崎さんは、ちょっとした有名人だ。

支援者とともに マレーシアへ

1978年生まれの奈良崎さんは、小学5年生のときに勉強についていけなくなり、知的障害があることが分かった。近くの中学へ行きたかったが同級生からいじめに遭い、特殊学級のある中学校へ1時間かけてバスで通った。本人活動に参加するようになったのは14歳のとき。地元のカラブジャに集う知的障害者が、「自分たちだって夜間に



Narasaki Mayumi & Sato Yoko

元青年海外協力隊
短期ボランティア

奈良崎 真弓

元青年海外協力隊
短期ボランティア
(支援者)

佐藤 陽子

街に飛び出していいんじゃないか」と「夜間飛行」と名付けたグループに入り、今でも仲間と一緒に余暇を過ごしている。成人してからは、自ら仲間「勉強してみない？」と呼び掛け、2002年に学習グループ「サンフラワー」を結成した。「毎回毎回、みんなで話し合っただけでプロフェッショナルな人（聴覚障害者）に来てもらって、どんな生活をしているのか話を聞いてみようって言うてます」。

昨年10月、上海で行われたセ



UVで行ったワークショップで。左端に座り、パソコンを操っているのは支援者の佐藤さん。マレーシアでは障害者年金がなく、障害者が自立して生活するのが難しい。就労や社会参加の機会も少なく、心の面のバリアーも高い

ミナーでこれらの活動を発表し、たとき、マレーシアから来たあるNGOのスタッフが彼女の話を聞いていた。クアラルンプール郊外にあるユナイテッド・ボイス(UV)という名のそのNGOは、JICAのプロジェクトがセルフアドボカシーを進める際のパートナーだ。「奈良崎さんに来てもらい、マレーシアに本人活動を広めたい」。UVの熱い思いがけない、奈良崎さんの1カ月間の協力隊派遣が決まった。

現地では、UVのスタッフらと一緒に8カ所の知的障害者のNGOと教育省を回り、当事者とその親、教員、スタッフらの前で自分の話を披露した。大勢の前でも明るく話せる度胸と、突然のレクリエーションの企画、ストにもさつと応じる彼女の姿に、多くの人が感銘を受けた。

そんな奈良崎さんの協力隊活動を、公私ともにサポートしたのが佐藤陽子さんだ。佐藤さんは協力隊の日本語教師、作業療法士隊員としてマレーシアに合計4年ほど滞在したことがあり、現地の言語や慣習、福祉に詳しい。発表資料の作成やワークショップでの通訳から、ホテルのシャワーの使い方を教えたり、私物の管理に至るまで、こまやかなフォローで任務や日常生活を助けた。

佐藤さんが障害のあるJICAボランティアの支援者を務めたのはこれで2度目。今年1月から鍼灸指導をしているシニア海外ボランティアの視覚障害者に、派遣前訓練と派遣後1カ月の間付き添い、一人で生活する基盤づくりのための支援を行った。この佐藤さんの支援者としての体験を参考に、今、JICAマレーシア事務所と青年海外協力隊事務局では、障害者のボランティア派遣のためのガイドラインを作成中だ。

「彼女みたいに
なりたい！」

JICAのボランティア事業



UVの作業所でおもち作りを手伝う。UVは東南アジアで唯一の政府登録をしている知的障害者の当事者団体で、会長以下、理事やメンバー全員が知的障害者。作業所で作るカードや食品の販売、セルフアドボカシー、就労支援などを行っている



マレーシア福祉局にて。左から佐藤さん、四方照美さん(JICAマレーシア事務所の福祉専門フィールド調整員)、奈良崎さん、福祉局障害者開発部部長、JICA専門家の久野さん。四方さんはじめ、活動中の協力隊員による支援とJICA事務所の障害者派遣に対する理解が奈良崎さんの活動を可能にした

「全日本手をつなぐ育成会」が発行する新聞の一面にも紹介された。「障害者の方々にとって、障害者だつて、頑張つてリハビリして、健常者になつたらボランティアに行けるんだ」じゃなくて、「支援者をつければ自分のまま行けるんだ」って、可能性を広げた派遣になったと思えます(久野さん)。「行ってよかった。奈良崎さんはマレーシアで過ごした1カ月を振り返ってこう言った。「でも、行く前にもうちょっと勉強

ことの効果は計り知れない。奈良崎さんと佐藤さんのおかげで、マレーシアの福祉局の理解は大きく進みました。今では障害当事者によるエンパワーメントはもちろん、障害当事者に支援者をつけるやり方も、当然という雰囲気になっています」

した。すでにグループがあったところでは、よりしつかりとした団体として成長するため、NGO登録を目指した活動を始めている。また、自分のやり方で自由に話す奈良崎さんを見て、「彼女みたいにになりたい!」と、ブレゼンテーションの方法を学び始めた人たちもいるという。日本側でも、奈良崎さんが協力隊に参加したこの影響は大き

かったように、彼女が所属する障害者団体を「全日本手をつなぐ育成会」が発行する新聞の一面にも紹介された。「障害者の方々にとって、障害者だつて、頑張つてリハビリして、健常者になつたらボランティアに行けるんだ」じゃなくて、「支援者をつければ自分のまま行けるんだ」って、可能性を広げた派遣になったと思えます(久野さん)。「行ってよかった。奈良崎さんはマレーシアで過ごした1カ月を振り返ってこう言った。「でも、行く前にもうちょっと勉強



(絵: 奈良崎真弓)



スーパーマーケットで働くUVのメンバーを訪ねた奈良崎さん。右隣のスウィーランさんはUVの支援者で、JICAの研修「職業リハビリテーション」コースに参加するため来日したことがある

Sato Yoko

さとう・ようこ 元青年海外協力隊短期ボランティアソーシャルワーカー隊員(支援者)。奈良県出身。大学で日本語教育を専攻し、卒業後は青年海外協力隊日本語教師としてマレーシアで活動。帰国後、作業療法士の資格を取得。重症心身障害児施設勤務を経て、3年後、協力隊作業療法士隊員として再びマレーシアへ。2008年4月、奈良崎さんの支援者としてマレーシアで1カ月間活動。

Narasaki Mayumi

ならさき・まゆみ 元青年海外協力隊短期ボランティアソーシャルワーカー隊員。神奈川県出身。養護高等学校を卒業後、知的障害者のための喫茶店勤務、高齢者施設スタッフを経て、障害者のガイドヘルパーに。知的障害者による活動を続け、その内容を広く紹介している。2008年1月、タイで実施された「知的障害者広域ワークショップ」にJICA短期専門家として参加。全日本手をつなぐ育成会の「わかりやすい障害者の権利条約編集委員会」委員として、知的障害者向けの条文作りにも取り組む。